

子どもを中心に据えた支援体制の再構築  
ー 配置型スクールソーシャルワーカーによる  
ミクロ、メゾ、マクロレベルにおける視点から ー

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
丸橋 明真

2000年以降、学校は、社会に向けて「開かれた学校」をスローガンに教育実践を押し進めてきた。そして現在、学校では様々な人々が教育活動に参加するようになってきている。その一つとして2008年より文科省は、「スクールソーシャルワーカー活用事業」を141地域でスタートさせた。そして2013年には、1355人(初等中等教育局児童生徒課)と配置になった。スクールソーシャルワーカー(以下SSWr)が関わった継続支援対象児童生徒の抱える問題では、家庭環境の問題が最も多く、続いて不登校、発達障がいに関する問題となっている。(2013年初等中等教育局児童生徒課)

著者は、2008年より配置型SSWrとして勤務をしている。そこで、問題事象を起こしては、教師に指導される生徒を見て、本来その生徒は、指導される対象ではなく、「支援される対象」であることを、いかに理解してもらおうか、暗中模索の日々があった。また、学校のスタッフとして学校側の視点に影響を受けることとなり、自身のアイデンティティが揺らぐこともあった。これらの子どもたちにとって、学校という場が自らを回復させ、本来、持っている優しさや人へのいたわりを引き出すには、どのような支援が可能なのだろう。

本研究では、子どもと日常的に関わる学校という場を基盤にして、子ども支援の在り方をもう一度振り返り、学校で子どもの視点に立った支援体制をどのように構築していくことができるのか、そのなかでSSWrの専門性はどこにあるのか、SSWrが果たすべき役割と機能はどのようなものなのかを検討した。事例分析では、ミクロ、メゾ、マクロレベルの視点から、各々の領域でSSWrがどのような役割を果たしたかを、自身が関わった事例で分析した。その結果、メゾレベルの校内支援体制の検討機能が低下することが、ミクロの個別支援にもマクロの関係機関との連携・協働にも悪影響を及ぼすことが見出された。そして、学校の支援体制を基盤に、内に、外に支援の輪を広げていくことが、ミクロ、メゾ、マクロレベルのそれぞれの領域を循環させることが示唆された。

本研究を通して、SSWr自身の存在意義とは何かを問い続け、そのプロセスで自分が揺れ動く様が、いつしか困難を抱えた子どもが、まさに自分の存在の根幹を問いかけている有様と被さっていった。この問いに答えるために、子どもの生きる、育つ権利を守る者の一人として、SSWrが存在するといえよう。「子どもを中心に据える」すなわち子どもの権利擁護を図り、これを基盤にして支援体制はつくられるべきであろう。